手話講習会　初級編

毎年度、募集開始から２～３日で定員に達するほど人気の手話講習会ですが、今年度も参加者は学部の１年生から４年生、教員など多岐に渡りました。７月に開講した対面での”ろう者との交流会”では、ろう者同士が生き生きとした手話表現で話をする様子を見て、受講生たちは驚くと共に充実した表情を見せていました。

講習中には、指文字や挨拶などの手話表現に始まり、趣味や出身地の話などを練習しました。参加者からは「ほんとに楽しかったです!! 学びきれてない部分もあったり自分で覚えられていないところもあるのに、先生方のサポートがあって楽しく学ぶことができました! また手話したいですありがとうございました!」といった感想等がありました。

今後もこのような講習会を通して、コミュニケーションの幅広さや文化の違いなどについて学べる機会を引き続き設けていきたいと思います。（益子）

2024年度 前期 よるダイバー

今シーズンのよるダイバーも例年通り、5月10日から6月28日の間、毎週金曜日18時から対面とオンラインのハイブリッド形式で実施しました。学部生・大学院生のほか、職員、プレミアムカレッジ生など、多彩なメンバーが「ダイバーシティ」という共通のテーマについて、共に学ぶ時間を過ごしました。参加者からは、「いろいろな考えの人と会うことができて、来て良かったなと思えます」「沢山お話ができて有意義な時間でした」など、さまざまな背景を持った参加者と学びあうことの意義を感じたことがうかがえる感想が寄せられました。（藤山）

東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」

ダイバーシティ推進室では、本学の教員・職員・学生が利用できる一時保育施設「都立大KIDS」を、南大沢駅付近にて運営しています。小規模な施設ですが、その分フレンドリーな雰囲気で、先生方の目が行き届く丁寧な保育が利用者のみなさまに好評です。祝日の授業日や入試など学校行事の際にも利用していただけます。施設の見学や体験保育も、随時受け付けています。利用にあたっては、事前の手続きが必要となります。詳細はダイバーシティ推進室、または学長室までお問い合わせください。（藤山）

コラム　ダイバーシティ・ブックレビュー（ダイバーシティ推進室：藤山新）

シオリーヌ(2020)『CHOICE 自分で選びとるための「性」の知識』イースト・プレス

本書は、You Tuberとしても活動する助産師の著者が、「性の話を、もっと気軽にオープンに」をモットーに著した一冊です。特にセックスと生理を中心的なテーマに、思春期を迎える若い世代や、子どもと接する大人を主な対象として書かれています。

思えば「性」、なかんずくセックスや生理にまつわる私たちの知識は、いったいいつ、どこで、どうやって得てきたものでしょうか。体系立てて教えてもらったような記憶はなく、それぞれがそれぞれの方法で、なんとなく知り、身に付けていったものがほとんどではないでしょうか。私自身のことを振り返ってみても、思春期に学校や書籍でしっかり学んだという記憶はありません。また、私の非常勤先の授業では、毎年、性感染症やアスリートと生理の関係について話をする機会を設けていますが、多くの学生が、これまでこういった話を授業で聞いた経験がなかったと言います。

しかし、性にまつわる知識や情報は、私たちが生きていくうえで必須のものと言えるでしょう。大切であるにもかかわらず、なかなか学ぶ機会の少ないこうした話題について、本書は確かなエビデンスや、著者の助産師としての経験を踏まえた知識を幅広く提供してくれます。そのうえで本書は、「男らしさ・女らしさ」の呪縛や「ルッキズム」など、ジェンダーにかかわるテーマに話題を広げ、さらには「自立」というキーワードも登場します。そうした本書の構成から考えてみると、「性」について知ることは、すなわち「生」について学ぶこと、と言ってもよいのかもしれません。リアルな対面の場面でも、本書のように性に関する話をカジュアルにできるような場を作りたいですね。

編集後記

★ 後期イベントのお知らせ ★

10月からは「手話講習会中級編」と「よるダイバー2024 シーズン2」の開催が予定されています。日時などの詳細は、ダイバーシティ推進室WEBサイトや学内のポスターなどでお知らせします。

東京都立大学　ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1　図書館本館1階
電話：042-677-1337（直通）／内線2571
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：https://diversity.fpark.tmu.ac.jp/
発行日：2024年8月30日
編集・発行

No.38 August 2024

Newsletter
ダイバーシティ通信

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY
東京都立大学

はたらく work
2024 may.27-31 DIVERSITY WEEK
TMU DIVERSITY PROMOTION OFFICE

「DIVERSITY WEEK 2024」開催報告

Contents

1
「DIVERSITY WEEK 2024」開催報告
ダイバーシティの視点から「働く」を考える
2
セクシュアル・マイノリティ講演会
「知っておきたいLGBTの就活・働き方」
バリアフリー講習会
「障がいの有無に関わらず、活躍できる環境づくりについて」
支援活動報告会
「バリアフリーチェック報告会」
3
文化的多様性映画上映会&トーク
「海辺の彼女たち」
よるダイバー特別編
「はじめてのダイバーシティ」
男女共同参画講演会
「私はどんな働き方がしたいんだろう? 自分を知るための『雑談』の力」
4
手話講習会　初級編
2024年度前期よるダイバー
東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」
コラム「ダイバーシティ・ブックレビュー」

ダイバーシティの視点から「働く」を考える

2024年5月27日（月）から31日（金）までの5日間、「ダイバーシティウィーク2024」を開催しました。このイベントは、「男女共同参画の推進」「障がいのある構成員支援」「多様性を踏まえた構成員支援」という、ダイバーシティ推進室の3つの取組を広く知ってもらうことを目指し、2021年度から始まったものです。今回は「ダイバーシティの視点から『働く』を考える」を全体のテーマとして、就活も含めた「働く」ことについての講演会や上映会を、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。また、メイン会場のTMUギャラリーでは、ダイバーシティ推進室の取組を紹介するポスターの展示や関連書籍の展示、ダイバーシティ推進室のニュースレターや女性研究者のロールモデル集、「学内における緊急時の障がいのある人への対応について」マニュアルなど、ダイバーシティ推進室が作成している資料の展示も行いました。

5日間のイベント全体で、教員、職員、学生、一般の方あわせて143名に参加していただきました。昨年度に引き続き、講演会にゼミ全体で参加したり、授業の中で学生にイベントをご紹介いただいたりするなど、多くの先生方のご協力をいただくことができました。また、今回はダイバーシティウィークでは初めての試みとして、男女共同参画講演会については、一般の方も対象として参加を呼びかけたところ、講師がXで講演情報を発信したこともあり、一般の方からも多くの参加を得ました。このほか、他大学や「ダイバーシティに関心を持っているが、具体的にどうアクションしてよいか悩んでいる」という企業の方などからお問い合わせがあり、関心のあるイベントにご参加いただくなど、幅広い背景を持った方に情報をお届けすることができたかと思います。地域への貢献が強く求められる公立大学としての役割を果たすという観点からも、社会のニーズを踏まえながら、今後も一般からの参加が可能なイベントの開催を検討する必要があると感じました。

参加者からは、今後の希望として、「アライの人は大学でどのような支援ができるのか」「ダイバーシティ推進室が行っている学生サポートの模擬体験」「ジェンダー論の歴史を学ぶ」「男性の更年期障害について」など、さまざまなテーマへの希望が寄せられたほか、開催形式についても「私は事情があり、自由に時間が作れない環境です。ただ、Zoomが定着して、配信のイベントや受講が気楽にできるようになりました」との感想が寄せられ、多様な方が参加することのできるハイブリッド形式のメリットを改めて感じる結果となりました。こうした声をもとに、今後もダイバーシティ推進室では、さまざまな取組を進めていく予定です。（藤山）

DIVERSITY WEEK 2024
セクシュアル・マイノリティ講演会

知っておきたいLGBTの就活・働き方

LGBT当事者の就職・転職活動の支援に関わっている三宅謙二さんを講師に迎え、LGBT当事者が、就活時や実際に働き始めてから直面しがちな困りごととその対応をテーマとした講演会を開催しました。

三宅さんは、LGBT当事者の就職活動に関して、まずは自身が何をしたいのか、ライフプランの中でどのように働きたいのかをしっかりと考えたうえで、就職先を検討するべきことを指摘しました。また、働くことを考える際に、当事者が「漠然とした不安」を感じやすいことを紹介したうえで、そうした不安の中身をなるべく具体的に考え、解決すべき優先順位や周囲への要望を明確化していくことが対応策になることを解説しました。これを踏まえ、就活や実際に働く中で企業などに対して配慮を求める場合には、なるべく具体的な形で、誰に、何を、どのレベルまで求めるのかを明確にしたうえで交渉することが必要であると述べました。

そして、多くの相談を受けた経験から、当事者の多くが自らのセクシュアリティについて相談できる場を求めており、近年は各大学にダイバーシティ推進室のような部署があり、社会にも当事者やアライのグループが増えてきたことから、そうしたコミュニティとつながることが、就活のうえでも有効であることを指摘しました。このほか、大学等の職員が心得るべき配慮事項や、就活を超えた心のケアや生き方など、具体的な事例を踏まえたお話は多岐にわたりました。

参加者からは、「当事者目線での就職活動と働き方を知ることができ、非常に参考になりました」「小さな目標を持つことも、誰もが当てはまる"自分に寄り添った生き方"として大切なことだと感じました」などの感想が寄せられ、講師の話に共感し、学びを得た様子がうかがえました。（藤山）

DIVERSITY WEEK 2024
バリアフリー講習会

障がいの有無に関わらず、活躍できる環境づくりについて

今回のバリアフリー講習会は、「障がいの有無に関わらず、活躍できる環境づくりについて」というテーマで行われました。講師としてお招きしたのは、社内で障がいのある従業員の方の就労支援に長年携わってきた専門家である森慎吾さん（ソニーピープルソリューションズ株式会社ダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョン推進室室長）です。講演では、障がいのある従業員が職場で直面する様々な課題や、その解決策について具体的な事例を交えながら説明されました。

森さんは社内でダイバーシティの推進をする際には、会社のミッションやビジョンの存在が重要な位置づけであると話されました。また、配慮提供においてはあくまで障がいのある従業員と無い従業員の双方による働きかけが大事であると話されました。

参加者からは、「お話しが分かりやすく、その姿勢が伝わってきました。人として生きていく上で、誇りを持って働くということが、生きる喜びや自信に繋がるのは、誰も同じです。障がい特性を持つ従業員と商品開発を進め、誰もが使いやすいユニバーサルデザインをいち早く取り入れていたことが強みとなっていることなど素晴らしいと思いました。」などの感想が得られました。

今回の講演を通じて、今後の取組の方向性が明確になったことは非常に有意義でした。これからも全ての構成員が安心して働き、生活できる大学づくりのために努力し続けていきたいと思います。（益子）

DIVERSITY WEEK 2024
支援活動報告会

バリアフリーチェック報告会（南大沢キャンパス1・6号館）

昨年度に行ったバリアフリーチェック講習会の内容について、今回の報告会では、3名の学生支援スタッフを中心に報告を行い、大学内の物理的なバリアについて参加者（教職員8名、その他3名）と共にその課題を共有しました。

報告では、バリアフリートイレや各棟のエレベーターに加え、建物の内外にある各通路の点字ブロックや障害物の有無について、点検を通して発見された課題を共有することができました。

参加者からは、「細かいところまでチェックしており、時間をかけて取り組んでいることが伝わりました。少しずつ環境が変わるといいな、と思います」という感想が挙げられました。

この発表の当日には車いすユーザーの職員の方からも、日々、大学で移動をする際に感じられているバリアについて話を聞くことができたと共に、今回の発表の講評では、当事者目線での調査が行われていることについて評価がいただけました。

バリアフリーチェックは今後も定期的に実施予定です。点検の結果については引き続き、本学のバリアフリー推進に資するため、学内において提言していきたいと考えています。また、学生支援スタッフのみならず、広く多様な方々の参加を募ることで、より多角的な評価を行っていけたらと思います。みなさんも日々の大学生活の中で、こういったバリアについてお気づきの点がありましたら、ぜひ当室までご連絡ください。どうぞよろしくお願いします。（益子）

DIVERSITY WEEK 2024
文化的多様性映画上映会＆トーク

『海辺の彼女たち』

ベトナムから技能実習生としてやってきた3人の女性を描く『海辺の彼女たち』の上映会を開催しました。上映に先立ち、日本における外国人労働者の現状や技能実習制度の概要とその課題等について、本学人文社会学部の丹野清人教授より情報提供を行いました。丹野先生は、技能実習制度においては、技能実習生の居住地も就労先も住所地で固定されているため、移動や転職の自由がないこと、それによっていわば「奴隷労働」化していることが最大の課題と指摘しました。一方で、外国人労働者の側も、こうした制度の欠陥や就業状況の厳しさを知ったうえで来日し、働いているケースも多いとも述べ、構造的な貧困がこうした制度の問題に拍車をかけていることが理解されました。

丹野先生のお話を踏まえて映画を鑑賞したのち、参加者が感想などをシェアする時間を持ちました。参加者からは、「根っからの悪人はいないのに、主人公たちがどんどん追い詰められる様子に胸が苦しくなった」「同胞のコミュニティも決してセーフティーネットとは言えず、搾取の構図ができているように感じられた」「法的にはグレーゾーンであっても、そこで生きていくことができるような場があることで、助けられる人たちもいるのではないか」など、さまざまな考えが共有されました。

最後に、丹野先生は外国人労働者について、「この国で共に生き、働いている『未来の市民』として扱う姿勢が必要なのではないか」と指摘し、地方自治体での諸権利の付与の可能性を示唆してまとめとしました。

参加者からは、「解説のおかげで映画を見る視点もふえ、より興味深く視聴できました」「最初にお話があってから視聴するスタイルが映画の理解度に貢献したと思います」などの感想が寄せられ、情報提供と感想シェアというプログラムについても、好意的な評価を得ました。（藤山）

DIVERSITY WEEK 2024
よるダイバー特別編

はじめてのダイバーシティ

「ダイバーシティ」をテーマに、ミニ講義やディスカッションなどで参加者同士が学びあう、ダイバーシティ推進室が前期・後期で金曜夜に開催している勉強会「よるダイバー」の特別編を開催しました。まず、参加者一人ひとりに「あなたの思うダイバーシティとは？」を尋ねてみたところ、「障がいの有無」や「ジェンダー」「国籍」などの個別的な事柄から、「垣根がない、壁がないイメージ」「さまざまな属性を持った人が、それを隠さずに仲良くできる状態」などのイメージまで、幅広い回答が寄せられ、「ダイバーシティ」のイメージも多岐にわたることが感じられました。

それを受け、ダイバーシティ推進室の概要と取組について紹介したのち、参加者各自が考える「ダイバーシティ」を本学で進めていくために、ダイバーシティ推進室に取り組んでほしい事柄や開催してほしいイベントについて、アイデアを出してもらうディスカッションを行いました。ディスカッションの中では、「発達障がいに関する勉強会の開催」「留学生の支援や留学生との交流や、学食等でのハラルフードなどへの対応」などの意見が出されたほか、「これからの人生に向けた知識をつけてもらうという意味も含めて、ダイバーシティに関する内容を授業として設けてもらう」「ダイバーシティというものに興味がない人にどこまで寄り添えるか、どう発信するか。たとえばマンガにしてみるとか」など、具体的アイデアも出されました。

活発なディスカッションを体験した参加者からは、「立場や年齢、性別の違いも乗り越えて、皆で意見を出し合う場に参加できたことがとてもありがたかったですし、非常に刺激になりました」と、よるダイバーの特徴をとらえた感想も寄せられ、参加者の満足度も高かったことがうかがえました。（藤山）

DIVERSITY WEEK 2024
男女共同参画講演会

私はどんな働き方がしたいんだろう？ 自分を知るための「雑談」の力

「雑談の人」として活動する桜林直子さんを講師に迎え、ダイバーシティ推進室の藤山が聞き手を務めるトーク形式で行われた講演会は、「雑談の人」という聞きなれない肩書とその仕事について伺うところからスタートしました。桜林さんの多彩なキャリアとその時々の決断についてお聞きしたうえで、就職・転職活動に向けての「自己分析」以前に、自分が何を大切にして働きたいのか、どんな働き方をしたいのかを自身で理解するための手段としての「雑談」がいかに効果的であるかということについて、豊富な経験に基づきながらお話ししていただきました。

桜林さんによれば、自身の「雑談」はカウンセリングではなく、頭の中で考えていることを一緒に見る、整理するための手段であって、普段の「雑談の人」としての活動の中では、桜林さんが何かをアドバイスすることはほとんどないと言います。また、就職活動の際に行うような「自己分析」は、どうしても就職するという目的があり、そこに向けた「選ばれるための自己分析」になるので、すでに自分で知っている自分のことしか出てこないことが多いと指摘し、それよりも、なんとなくモヤモヤしていることを、相手に向けて言葉にして出してみることで自身の考えが整理される「雑談」の中にこそ、新しい発見やヒントがあると伝えました。

参加者との質疑も活発に行われ、「自分の困り事のために、どうすれば解決できるのか自分の問題と向き合いたくなりました」「今後の自分にヒントになることが聞ける気がしたのですが、とても参考になりました」「ものの見方・視点の変え方・言葉に上手くできないモヤモヤを言語化して下さり、気付きが本当に多いです」といった感想のほか、「桜林さんが起業時に考えた事やしたことを具体的に聞けた点が良かった」など、今回のテーマに即した感想もいただくことができました。（藤山）